

目を閉じて見えた大聖堂—虚構が実相に迫った瞬間

飯島 昭典

はじめに

「目をつぶる」(“ to close one’s eyes ”)という熟語には「死ぬ」という意味や、「注意をはらわない」などの意味のように、消極的、否定的な文脈で使われる事が多いものである。しかし、レイモンド・カーヴァー(Raymond Carver, 1939-88)の短編「大聖堂」(“ Cathedral ”, 1983)¹の主人公の男は、結末において目をつぶるという行為において、真理を見出すという発見を行なう。日本語で「心の眼」という言葉があるが、彼はまさに最後に物事の本質を目をつぶることによって見通したのである。

「大聖堂」というカーヴァー作品の代表ともいえるべき作品で、結末の「真理の顕現」(“ epiphany ”)について考察を行なうことは、研究上避けられない事のように思える。実際多くの批評家が結末の「真理の顕現」について解釈を研究の軸としている。ロバート・クラーク(Robert Clark)は主人公である語り手が、過去の自分を反省するという文脈で論を展開し、「「大聖堂」における語り手の真理の顕現は、過去の自分自身を別個の存在として捉える場合にのみ、可能なのである」(“ The narrator’s epiphany in “ Cathedral ” is only possible because he treats the person he was in the past as a separate entity ”)とし、自分自身を客観視することにより、得られる啓示であるとしている。

カーク・ネセット(Kirk Nessel)も結末の解釈について次のような評を行っている。

[The] narrator of “ Cathedral ” finds not escape but sanctuary within self-confinement, his sanctuary existing, by virtue of hip, close eyes, within that inner vestibule

of self, where selfishness gives away at last to self-awareness.

「大聖堂」における語り手は自分自身を閉じ込める事によって、逃れる事ではなく、聖域ともいうべき場を見出したのだ。その聖域は突然目をつぶることによって得られる自己の内面への入り口であり、そこでは利己的感情がついに自己発見へと至る場なのである。

つまりネセツも自己認識という内側へのベクトルの発見としているのである。

そしてクリス・ブロック (Chris Bullock) は「大聖堂を描くことはつまり一種の男らしさを構築するメタファーとなる。あるいは少なくともそれを指し示すものとなる」(“ Drawing a Cathedral, then, becomes a metaphor for building, or at least designing, a kind of masculinity ”) とし、大聖堂を描くことによる「男らしさという自我の慣例的社会通念」(“ the conventional socialization of the masculinity ego ”) を超えたものを理解するとしている。ブロックの場合も主人公の内省という局面を迎えた瞬間である、としている。

これらの批評家の述べる「真理の顕現」について、それは主人公の自己発見である、とする意見に対して私は反対するつもりはない。何らかの意識の変化があったのは、明らかな事実である。ここで私が述べようとするのは、その意識の方向についてである。私は自己発見の先に見出したものがある、という事を証明したいと思う。主人公の発見は自己という内側ベクトルにとどまるのではなく、自分とは別の他者に対しての外側ベクトルの発見であると考えている。これを証明するために、ここでは第1節では見えるものと見えないものという構

造について注目し、第2節では大聖堂を描く行為の意味について説明する事にする。目を閉じることによって、主人公が見えたものは一体何なのであろうか。

1. 見えるものと見えないもの

作品を構造的に分析する事はブロックの論文において明らかにされている。閉ざされた空間を作品の舞台にする事が多いカーヴァーであるが、ブロックは主人公の意識に注目して自己の内側にあるものと外側にあるものについて以下のように述べている。

[The] narrator's powerful need to draw the line between what is inside and what outside is revealed by the anxiety and aggression the narrator displays about having a blind man in his house.

語り手が内側にあるものと外側にあるものについて、強力に線引きする必要を感じている事は、盲人を家に招く事によって起こる彼が見せる心配と反発性によって明らかである。

カーヴァーの特徴である空間の問題をブロックは主人公の内面と外面の問題として捉えたのである。

私はここでブロックの論じる内面と外面という構造の問題を発展させて、主人公を取り巻く見えるものと見えないものという、構造の問題として論じてみたい。短編「大聖堂」の書き出しは「その盲人である妻の古い友人は、泊りに来ることになっていた」(“ This blind man, an old friend of my wife's,

he was on his way to spend the night ”) (514) というように視覚を意識する表現となっている。これは文法的には不要である wife の所有格 wife's で明らかにされる倒置の文法構造や付帯状況を表す分詞構文などによっても強調されている。書き出しの視覚表現が作品の見えるもの（明らかなもの）と見えないもの（明らかでないもの）の特徴に深く関係しているのである。

まずはじめに作品中で見えるもの、明らかなものについて説明する。「私は訪問を歓迎する気にはなれなかった」(“ I wasn't enthusiastic about his visit ”) (514) とあるように、夫はロバート (Robert) の訪問を快く思っていない。昔からの友人としてロバートに丁寧に接する事を期待される夫であるが、彼は明らかに嫉妬と思える言葉と態度を連発する。妻がもし夫の友達が家にやってくるなら、心から温かく歓迎するつもりだわ、と改めて丁寧に接する事を願う時も、「俺には盲人の友達はいないよ」(“ I don't have any blind friends ”) (516) と皮肉を言う彼である。そしてロバートの妻だったビューラ (Beulah) についても「男の奥さんはニグロだったのか」(“ Was his wife a Negro? ”) (516) と黒人への差別用語である「ニグロ」という呼び方をしているのである。ほかにもロバートがやってきたら「ボウリングにでも連れて行こう」(“ Maybe I could take him bowling ”) (516) 等の発言にも皮肉は明らかである。言うまでもなく盲人にとってボウリングをする事は、不可能に近い遊びである。

このように妻の友人の訪問に対して、不満を示す夫であるが、それらの皮肉の効果は全くない、逆効果となっている。「頭がおかしくなったの」(“ Are you crazy? ”) (516) と全く一蹴されたり、盲人の友達どころか「あなたにはどんな友達もいないわ」(“ You don't have any friends ”) (516) とあしらわれる始末である。

そして夫の持つ盲人に対しての偏見、つまり「盲人はゆっくり動き、決して

笑わない」(“ the blind moved slowly and never laughed ”) (514) というのも映画で見た知識と彼は説明しているが、この盲人へのマイナスイメージも妻の友人がやってくるという現実によって引き出された偏見なのである。つまり、盲人であるという現実が、ロバートに対しての不快感の理由の第一にあるのではなく、妻と親しかった男がやってくる、という嫉妬が不快感の理由のはじめにあるのである。盲人への偏見は、嫉妬への飾りつけにすぎない。ロバートと初対面のときの夫の様子も彼の嫉妬からくるぎこちなさを表している。「以前にもお会いした事があるように思えます」(“ I feel like we’ve already met ”) (518) と礼儀正しい挨拶をするロバートであるが、夫が初めて話す言葉は「同じく」(“ Likewise ”) (518) と極端に短いぶっきらぼうな返事である。そのあと「ようこそ、あなたの事はよく聞いております」(“ Welcome. I’ve heard a lot about you ”) (518) と型通りの歓迎の様子を見せるが、これはとってつけた言葉、つまり「同じく」の無愛想さを打ち消すためのわざとらしい言葉という印象を持つのである。続く会話で「ところで、列車のどちら側に座りましたか」(“ Which side of the train did you sit on, by the way? ”) (518) 等という言葉も、外の景色を確認できず、進行方向を分かりづらい盲人に対しては、答えにくい質問であり、皮肉とも取れないこともない会話なのである。そして盲人の食事作法の見事さや態度の礼儀正しさは、²彼の偏見を払拭するものであり、夫が感じる妻の友人への嫉妬という不快感、を助長するものである。作品中で明らかに見えるものは、夫が感じている嫉妬という不快感である。

逆に見えないもの（明らかでないもの）には、どういうものがあるだろうか。それは端的に言えば、妻とロバートの関係を挙げる事が出来るであろう。妻はあくまでロバートを友人として夫に紹介しているが、この二人の関係は、友人同士の関係を超えるものであることが予想される。妻がロバートと仕事を

する最後の日に、ロバートから顔を触らせてほしい、という願いをされることになる(514)。盲人が顔を確認するための仕草と言ってしまうえばそれまでだが、ここに示されるのはロバートによる妻への恋愛感情である。性的な意味合いを含んでいる、と考えるてもそれほど見当違いとは言えないのではないだろうか。上司と部下という関係を超えての行動と考えても問題ないはずである。しかも作品冒頭の次の箇所は二人の関係をほのめかすものとして、重要なものであると思われるので、引用してみる事にする。

She hadn't seen him since she worked for him one summer in Seattle ten years ago. But she and the blind man had kept in touch. They made tapes and mailed them back and forth.
(514)

10年前の夏にシアトルで彼のために働いて以来、彼女は彼に逢っていなかった。しかし、彼女とこの盲人は連絡を取り合っていた。二人でテープを作って、互いにやり取りしていたのだ。

10年前から続く二人のやり取りというのは、普通に考えれば妻とロバートの関係をほのめかす何かがある、と考えていいのではないだろうか。妻とロバートの関係は、恋仲という言葉が大きすぎるかもしれないが、深い仲という事が出来るものである。ある意味、夫と妻の関係以上のものである、とも予想できるものである。このテキストで、二人の恋愛関係を明らかにしている箇所はないが、このような説明は、妻とロバートの関係を怪しむのに十分な証拠となるのではないだろうか。ここで示されているのは、クラークが使う「男の結婚生活の脆弱さが暗示されている」(“The implication is that the man's

marriage is fragile ”) という事実である。³

見えるものと見えないものの構造を持つこの作品であるが、さらにこの性質について付け加える事が出来ないであろうか。それは見えるものである嫉妬の原因が、見えないものである妻とロバートの関係にある、という事である。見えないものが主人公の心象に影響を与えるのは、「コンパートメント」(“ The Compartment ” , 1983)の中のマイヤーズ(Myers)においても明らかである。マイヤーズは自分から離れて暮らす息子へのプレゼントの時計を携えて、息子に会いに来たわけだが、そのプレゼントを喪失すると、息子には会いたくなかったのだ、と自分で勝手に結論づけて、会うのをやめてしまう。時計の喪失という現象、見えないものによる主人公の心の支配は、この作品でも表されているのである。「大聖堂」においては、主人公の感じている嫉妬は、見えないものが原因なのである。主人公の夫に関して述べれば、この作品の主軸となるものは、見えないものである。それは、作品の結末で目をつぶり、視界を無くすという行為と有機的なつながりを持つものなのである。作品は見えないものがモチーフとして重要な意味を持っているのである。

2. 大聖堂を描く意味

嫉妬という状態から夫はロバートに対してよそよそしさを保ち続けるのかと言えば、答えはノーである。彼はロバートに対して歩み寄りを見せるのである。二人の歩み寄りは、夫がロバートの手を取り、テレビに映った大聖堂と一緒に描くという行為において頂点をなすが、まず始めに夫の気持ちの変化について考察してみることにする。

妻が一時的に自分の部屋へと引っ込み、夫とロバートは二人きりになるのだが、彼ら是一緒になった直後にある行動を共にする事によって、交流の兆しを

見出すことになる。それは麻薬を一緒に吸う、という行為である。夫とロバートは、麻薬といういわば望ましからざるものによって、歩み寄りを見せるのである。夫は今巻いたばかりだからと、ロバートに嘘をついて吸引を勧めるが、「でもそんなものはたちまちに出来る」(“but I planned to do so in about two shakes”)(522)というように、麻薬の巻きたばこを作ることは、慣れているのである。普段から吸いなれていることが分かるが、このなれ親しんだ行為にロバートが参加する意味は大きい。「少し一緒にやってみよう」(“I’ll try some with you”)(522)と誘いに乗るロバートに対して「正にそう来なくっちゃ」(“That’s the stuff”)(522)と気分を良くする夫なのである。夫は自分の日常のレベルにロバートが身を落とした事を、喜ぶのである。この麻薬の吸引は、二人にとって共感覚の始めの行為である、と言って問題ないだろう。

実際に夫は麻薬を吸い続けて眠気を覚えるロバートに対して二階まで連れて行きましょうか、と親切を見せる。迷惑じゃなかったらもう少し一緒にいたい、と言うロバートに対して「結構なことだ」(“That’s all right”)(524)、「連れがいればありがたい事だ」(“I’m glad for the company”)(524)と述べるのである。しかもそれは「多分そう思っていた」(“I guess I was”)(524)と彼が語るように本心からの言葉なのである。今やロバートは夫にとって邪魔な存在ではなく、心を許した必要な存在なのである。

テレビに映る大聖堂の映像に対しても夫とロバートの共感覚は、如実に表されている。大聖堂の様子を細かに説明する夫であるが、ロバートにはあまり伝わらない。⁴しかし、大聖堂の描写から始まった会話は、大聖堂そのものの話になり、バプティスト教会との差異、大聖堂建設に携わる何世代にもわたる家族の仕事など、会話の発展を見るのである。この段階での二人の共感覚を可能にしている手段は、言葉主導のものである、と言えるであろう。しかし、言葉主

導による大聖堂の会話、そしてそれに伴う共感覚は限界に達する事になるのである。どんなものか思い浮かばないから説明してくれと頼むロバートであるが、夫は「うまく説明できていないな、どう？」(“ I’m not doing so good, am I ? ”) (526) と自分の限界を知ることになるのである。

言葉の限界を打開する行為は、紙の上に手を取り合っただけで画面に映った大聖堂と一緒に描く行動である。妻が目を覚まして、場が三人になった後も、夫とロバートは一緒に描き続ける行為を続けるのである。妻が少しの間席を外していた時思った「妻が下の階に戻ってきてほしいと思った。盲人と二人だけで一緒になりたくなかった」(“ I wished she’d come back downstairs. I didn’t want to be left alone with a blind man ”) (522) という状況から大きな変化を経験したと言えるであろう。「あなたたち何やってるの？」(“ What are you doing? ”) (528) という問いかけにも答えず、夫とロバートは大聖堂を描くことに夢中になるのである。この状態は、川瀬 裕子氏が述べる、夫が「ことばのみによる説明の限界に気づき始める。ロバートも自分の理解の限界を知る。二人が、それぞれに、事態を自分の問題として受け止めた」(212) 結果と言えるであろう。麻薬の吸引から始まる共感覚の兆しは、大聖堂の模写で共感覚の極みの状態となるのである。

この大聖堂を描くという共同作業により得た共感覚には、当初と比べて明らかな義務感の変化を見出すことが出来る。ロバートに対して嫉妬を感じていた夫であるが、同時に同情と憐みという高みから見下ろした感情を、抱いていたのは明白である。ロバートの亡くなった妻との夫婦生活について、次のような心情を示す夫である。

All this without his having ever seen what the goddamned woman looked like. It was beyond my understanding. Hearing

this, I felt sorry for the blind man for a little bit. And then I found myself thinking what a pitiful life this woman must have led: Imagine a woman who could never see herself as she was seen in the eyes of her loved one. . . . (517)

その間彼はその女の姿を少しも見る事が出来なかった。それは私の理解を超えている話だった。その話を聞いて、私は盲人の事が一瞬気の毒になった。それから、女がきっとみじめな生活を送って来たに違いない、と思った。自分が愛する人間の瞳に自分が映ることは決してない、というのはどんなことだろうか。

ここに示されているのは視力という観点から述べられた憐みである。自分には備わっていて盲人には欠けている視力に関して、夫は理解を示すことが出来ないのである。それは欠けているから可哀そうという感情であり、決して自分と同じ立場で考える事が出来ていない状態である。あくまでもこの段階では、高みにいるのが自分であり、視力を欠いた盲人は、憐れむべき存在として同情を示しているにすぎないのである。

立場を異にしており、相手との距離を感じさせる登場人物を思い出さないだろうか。それは「くつわ」(“ The Bridle ”, 1983)のハーリー(Harley)である。彼はホリッツ(Holits)の被った怪我にも、これから先のホリッツの家族の生活にも全く関心を示さない。共同住宅を出ていく彼らに対して「気違いスウェーデン人」(“ Crazy Swede ”)(512)と一人で罵るような事までするのである。「大聖堂」の主人公はこの場面で同情を示している。ハーリーは全く同情を示さない。しかし、彼らに共通するのは注意を払うべき相手と同じ立場にはおらず、感情の領域を異にしている点である。同情していようと

情していまいと、彼らは同じ次元での立場に立っていない、という点で一致を見るものなのである。

「大聖堂」における義務感の変化は同情を超えた理解を経験した時に明らかになる。作品の結末でロバートと夫が描き終わった大聖堂についてやり取りする場面を引用してみることにする。

Then he said, “ I think that’s it. I think you got it, ”
he said. “ Take a look. What do you think? ”

But I had my eyes closed. I thought I’d keep them that way
for a little longer. I thought it was something I ought
to do.

“ Well? ” he said. “ Are you looking? ” . . .

“ It’s really something, ” I said. (529)

そして彼は言った。「もういいだろう。もう終わったろう」彼は言った。

「目を開けて。どう思う？」

しかし私は目を閉じたままだった。私はそのようにしてもう少しいようと思った。そうしなければいけないように思えた。

「どう？」彼は言った。「見てる？」……

「これはすごいや」私は言った。

目を開けてみる、と言われながらも目を閉じたままの状態、盲人と同じ立場にあり続ける事を決めた夫は、ここで義務感の変化を経験している。ここでは視力を欠いた存在としてのロバートへの同情を、自分が同じ状態になるという行為において理解へと変化させているのである。盲人に対して健常者として

接しなければならない、妻の友人だから接しなければならない、という義務感
は、同じ状態でい続けなければならないという、立場の同一性への義務感へと
変化したのである。これは決して高みからの憐みというものではなく、立場を
同じにした理解の感情という事が出来るであろう。しかもそこには、目を閉じ
た状態で描かれた大聖堂を感じるという、真理の顕現も含まれる。「今までの
人生で感じたことのないものだった」(“ It was like nothing else in
my life up to now ”)(528)という説明は、夫が見えるはずのない大聖堂
を目にするという虚構が、彼の人生の実相に迫った瞬間なのである。

大聖堂を描くことの意味は、嫉妬という状態から共感覚へと変化し、その共
感覚は同情を超えた真の理解へとつながるといふ、一連の夫の意識の変化を起
こすものなのである。

息子のひき逃げという喪失の状態と登場人物であるパン屋の感じている孤独
が重なって生まれた共感覚の作品には、「ささやかだけれど、役に立つ事」(“
A Small, Good thing ”, 1983)がある。息子を失った夫妻と長年孤独を
感じているパン屋は、作品の結末で互いに不全性という一致を見る。この場合
の共通項は「大聖堂」の場合と異なり、負の状態での共感覚という事が出来る
であろう。

まとめ

主人公は見えない、妻とロバートの関係に嫉妬し、見えないものがこの作品
のモチーフである事を第1節で示した。そしてその嫉妬は、大聖堂を描くとい
う共同作業によって夫とロバートは共感覚を持つに至り、目をつぶり立場を同
じにする事によって、当初の義務感の意味が変化し、真の理解へと変わってい
った、という事を第2節で証明した。

嫉妬という状態から理解という状態に変化したのは、当然望ましい心の変化であると言える。妻が寝入ってしまい、ロバートと妻との関係をほのめかす状況が一時的に崩れ、夫とロバートだけになる、という状況が夫の経験した理解の手助けとなった事は、言うまでもない。嫉妬を起こさせる目の前の光景が、一時的に消える事で、ロバートと言わば、がっぷりよつの心の交流を持つ状況が整ったのである。

嫉妬が相互理解へと変化する精神の高尚化が、作品中で示される大聖堂の描写と重ね合わせられるのは興味深い事である。

“ They reach way up. Up and up. Toward the sky. They're so big, some of them, they have to have these supports. To help them up, so to speak. These supports are called buttress. . . . ” (526)

「ずうっと上に伸びているんです。ぐんぐんとね。空に向かって。これらのいくつかはあまりにも巨大なので支えを必要とします。まあ、つかい棒みたいなさ。それらはバトレスと呼ばれているんだ……」

結果的にこのテレビに映った大聖堂を紙に描き、目をつぶった状態でその荘厳さに感動する夫であるが、この大聖堂の空という高みに向かって伸びていく様子と、精神の高尚化、つまり嫉妬という状態から相互理解という心の高みへと向かっていく様子が重ねられるのである。バトレスは、精神の高尚化を可能にした盲人の存在と重ね合わせることが出来る。大聖堂は夫の内面の状態と重ね合わせられるイメージとして読む事が可能なのである。

実際に夫は目をつぶった状態で心に描いた大聖堂に感動するという、虚構に

よって人生の意味の表れという実相を経験する事になるが、この目には見えない大聖堂というのも偶然の結末ではないのである。精神の高尚化は、実際には目にする事の出来ない、人間の内面での変化である。夫は内面の変化を感じ、精神の高尚化を直感的に感じ取った結果、その大聖堂によって表される精神性に価値を見出したのである。

主人公の感じている他者理解と精神の高尚化という能動性は、「注意して」(“Careful”, 1983) のアル中療養中の主人公の、タイトルとは正反対の消極性と明らかな対比を示している。妻を今、まさに失おうとしている状態にもかかわらず、彼に切迫感はない。むしろ今までの状態よりも状態は悪化して、余計に自分の生活に注意を払わなくなっていく様子を示しているのである。この意味でタイトルの「注意して」は一種のアイロニーである。

結末の真理の顕現について自己発見の先に見出したものがあるはずである、という観点から出発した本稿の論題に結論を出したいと思う。結末で夫が目を閉じる事によって感じ、そして経験した事は一体なんであろうか。それはロバートに対して嫉妬を超えた共感覚という相互理解の結果⁵である精神の高尚化を、心の大聖堂という虚構の内に見出したのである。夫が目にしたのは、相互理解という外側へのベクトルを可能にした精神の高尚化された姿である。⁶

註

1. 以下「大聖堂」からの引用は、レイモンド・カーヴァー、*Raymond Carver: collected stories*, ed. William L. Stull and Maureen P. Carroll 所収の「大聖堂」に拠る。
2. ロバートの食事作法の見事さ、話しぶりは彼の社会的地位の高さを暗示させるものであり、麻薬を常習する夫とは明らかな対照をなす。知的レベルは嫉妬の強さと関係がある事は、比較的よく知られているが、夫の知的レベルと嫉妬の強さを関連させる事も、無理な推論ではない。
3. カーヴァーの短編では夫婦の危うい関係が描かれることが多いが、こうした卑近な事例が、カーヴァーの描く日常性の中での思いがけない発見という暖かな読後感を読者に残す。夫婦というのは、日常性を描くうえで、最も身近な題材であり、それゆえ読者にとっても感情移入しやすい物語なのではないだろうか。
4. この夫とロバートの大聖堂に関する会話で、ロバートが夫に話を合わせて、大聖堂を知らないふりをした、と考えることも可能である。言葉使い、普段の習慣から知的レベルの差異を暗示させる二人だが、ロバートが夫に対して大聖堂の説明をさせることで、知的劣等感の払しょく、教えるという行為によって、優越感を感じさせた、とも十分に考えられる。教えることによって気分が上向くという事は、ままたる事である。
5. 相互理解が何なのか、という事は今後の研究に委ねるが、例えば愛の感情、

つまり妻とロバートに対しての嫉妬を超えた、愛そのものの理解なども考えられるかもしれない。高尚化された精神によってロバートと妻の許されはしないが、二人の感じている愛について、一定の理解を示す事は、論の展開によっては、可能かもしれない。見る事の出来ないビューラーの姿が以前話題になり、結末で見えるはずのない大聖堂を見るという事は、視覚を超えた愛そのものへの理解、と考えられないだろうか。妻とロバートの間の愛という高尚なものは理解するが、二人の関係は許さないという、愛そのものの理解を得た、と推論するのは論点の飛躍だろうか。

6. 「精神の高尚化」と似た意味でサルツマンは「感情の深化」(“ depth of feeling ”)と呼んでいるが、彼の研究では描かれた大聖堂との関連や、義務感の変質といった事は説明されていない。その意味でも本稿において精神の高尚化についてつぶさに説明する事は有意義な事ではないだろうか。

引用・参考文献

- Bullock, Chris J. "From Castle to Cathedral: The Architecture of Masculinity in Raymond Carver's "Cathedral"" *Journal of Men's Studies* 2.4 (May 31, 1994): 343. Pro-Quest. Web. 4 Oct. 2013.
- Carver, Raymond. "A Small, Good Thing" *Raymond Carver: collected stories*, Ed. William L. Stull and Maureen P. Carroll, New York: The Library of America, 2009. 402-425. Print.
- - -. "The Bridle" *Raymond Carver: collected stories*, Ed. William L. Stull and Maureen P. Carroll, New York: The Library of America, 2009. 497-513. Print.
- - -. "Careful" *Raymond Carver: collected stories*, Ed. William L. Stull and Maureen P. Carroll, New York: The Library of America, 2009. 441-451. Print.
- - -. "Cathedral" *Raymond Carver: collected stories*, Ed. William L. Stull and Maureen P. Carroll, New York: The Library of America, 2009. 514-529. Print.
- - -. "Compartment" *Raymond Carver: collected stories*, Ed. William L. Stull and Maureen P. Carroll, New York: The Library of America, 2009. 393-401. Print.
- Clark, Robert C. "Keeping the Reader in the House: American Minimalism, Literary Impressionism, and Raymond Carver's "Cathedral"" *Journal of Modern Literature* 36.1 (Fall 2012):

- 104-118, 196. *Pro-Quest*. Web. 4 Oct. 2013.
- Giraldi, William. "Carver's Dream" *Sewanee Review* 117.4 (Fall 2009): 669-674, R83. *Pro-Quest*. Web. 4 Oct. 2013.
- Leyboldt, Gunter. "Raymond Carver's "Epiphanic Moments" " *Style* 35.3 (Fall 2001): 531-547. *Pro-Quest*. Web. 4 Oct. 2013.
- Nesset, Kirk. "Insularity and self-enlargement in Raymond Carver's Cathedral" *Essay in Literature* 21-1 (Spring 1994): 116. *Pro-Quest*. Web. 4 Oct. 2013.
- Saltzman, Arthur M. *Understanding Raymond Carver*, Columbus: University of South Carolina Press, 1988. Print.
- Weber, Myles. "Raymond Carver's Comic Error" *New England Review* 33.3 (2012): 63-79, 186. *Pro-Quest*. Web. 4 Oct. 2013.
- 川瀬 裕子 「レイモンド・カーヴァーの作品から3作品を読むー『ささやかだけど、役にたつこと』、『大聖堂』、『保存されたもの』についてー」、札幌学院大学人文学会紀要 第83号、サイニー、(ウェブ、10月4日、2013年)。
- 菊池 せつ子 「レイモンド・カーヴァー『大聖堂』に関する一考察」、武蔵丘短期大学紀要 第11巻 2004年、サイニー、(ウェブ、10月4日、2013年)。